

くにきゅうせき
史跡 恭仁宮跡（山城国分寺跡）
令和5年度の発掘調査成果（第105次調査）

1. 恭仁宮について

京都府と奈良県の境に近い木津川市加茂町の瓶原地域みかのほらには、現在美しい田園風景が広がっています。ここに、天平12年（740）、聖武天皇によって恭仁宮が造営され、平城京から都が遷されました。恭仁宮では「墾田永年私財法」が定められるなど、歴史上の重要な舞台となりました。現在、恭仁宮跡及び山城国分寺跡は史跡に指定されています。

2. 恭仁宮の範囲

昭和48年度から続く発掘調査によって、恭仁宮や山城国分寺の姿が次第にわかりつつあります。恭仁宮の範囲は東西約560m、南北約750mの規模で、「大垣」と呼ばれる大規模な築地塀に囲まれていました。宮内の施設の区画も、裏面の図のように明らかになりました。

3. 平城宮から恭仁宮、山城国分寺へ

『続日本紀』しよくにほんぎによると、恭仁宮の大極殿と大極殿院の回廊は、平城宮から移築したとされています。天平13年（741）には、造営途中の恭仁宮で「国分寺建立の詔」が発せられました。

都が平城宮に戻ったのち、天平18年（746）に恭仁宮大極殿は山城国分寺の金堂こんどう（仏像を祀る建物）として施入されることとなりました。

山城国分寺は、南北約330m（3町）、東西約273m（2.5町）が築地塀ついでいで囲まれており、全国的に見ても屈指の広さの国分寺であったことがわかっています。これまでの発掘調査で、金堂や七重塔そうぼう、僧房かじこうぼうのほか、鍛冶工房跡、瓦窯など寺を支えた施設が見つかっています。



山城国分寺跡の復原CG(木津川市教育委員会提供)

掘立柱建物を2棟発見

今回の調査では、掘立柱建物が2棟見つかりました。

建物1は調査区西端で見つかった建物です。柱掘方の形は円形で、北で西に約6°振れています。建物の南辺が見つかったのみですが、中世以降の建物の可能性があります。

建物2は調査区のほぼ中央で見つかった建物です。柱掘方の形は方形で、北で西に約1.5°振れています。東辺は後世の削平で失われていますが、いわゆる総柱建物と考えられます。主軸角度がこれまで見つかった国分寺の建物と一致していることから、国分寺期の建物である可能性があります。

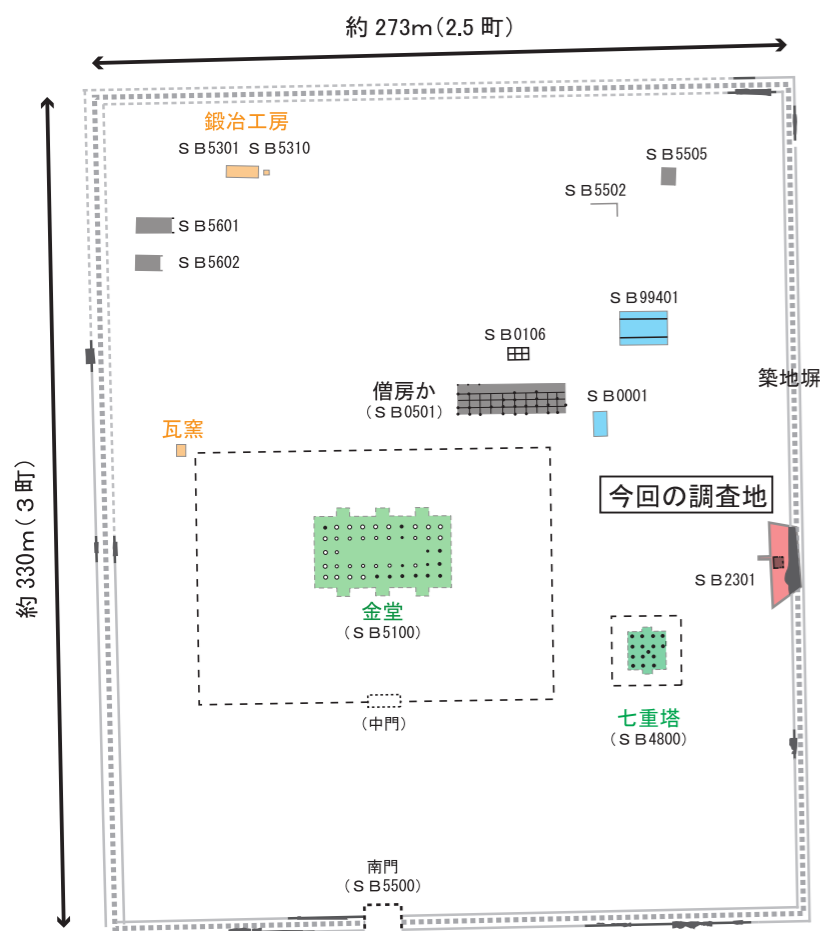


図1 山城国分寺跡全体図 (S=1/3,000)

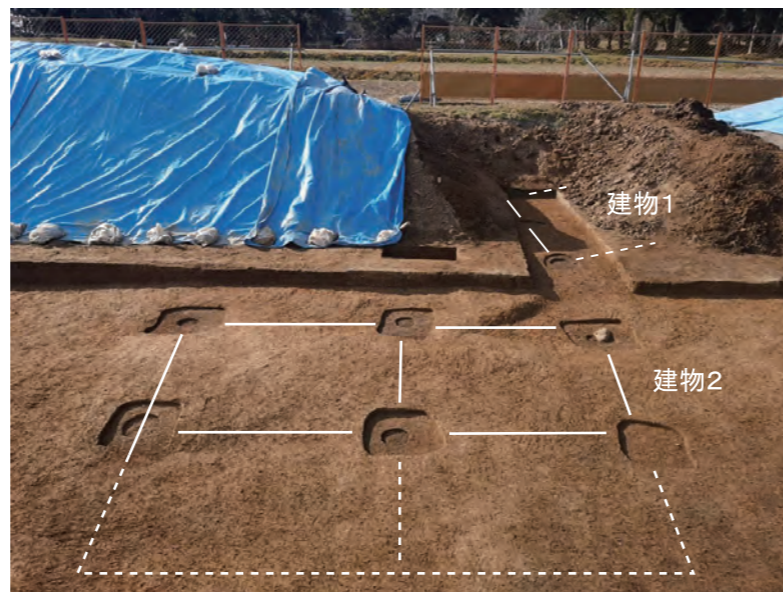


写真1 建物1、2が見つかった状況

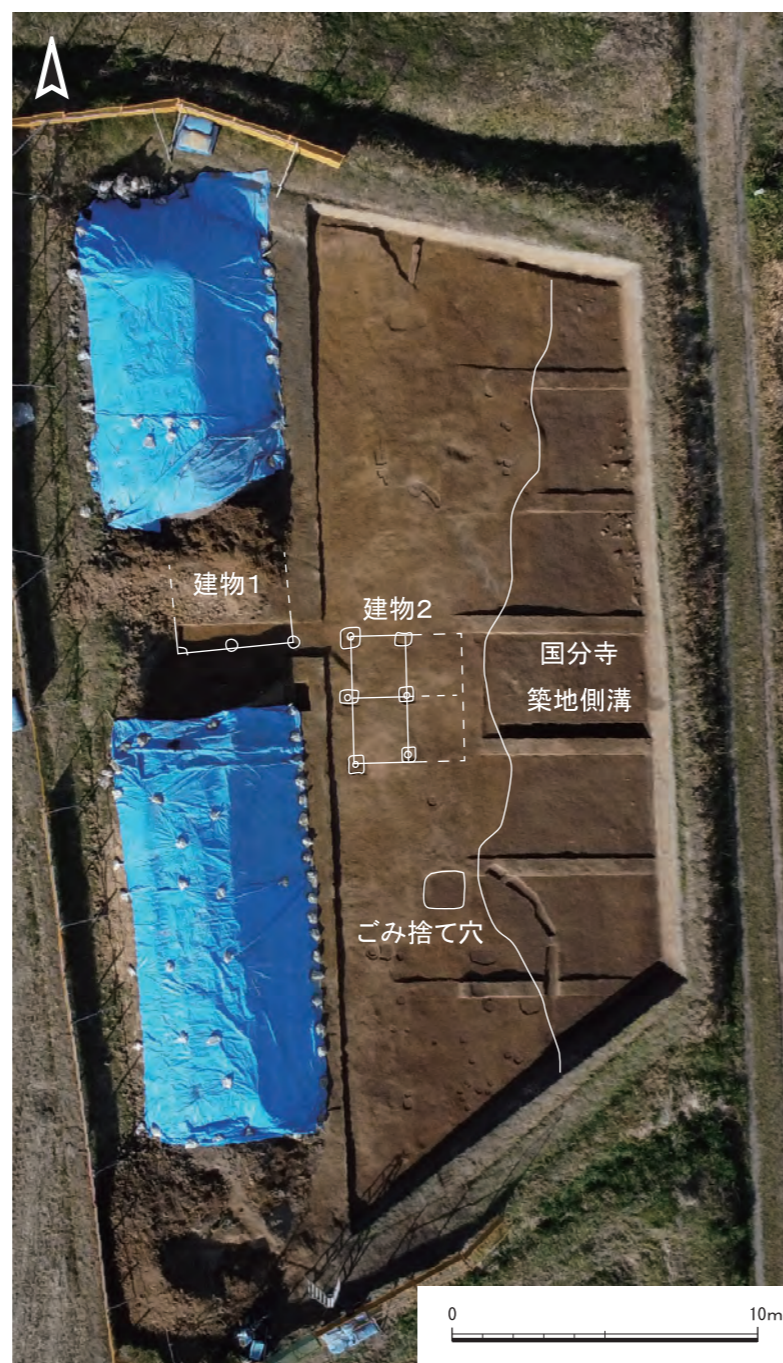


写真2 今回の調査成果 (S=1/250、上が北)

国分寺の東辺の築地塀を発見

調査区の東側では、南北に延びる溝が、総延長約25mにわたり見つかりました。溝の幅は最大約6mで、最も深いところで深さ60cm程度です。これまでの調査成果から、国分寺の東側を区切る築地塀に伴う排水溝と考えられます。また、調査区東端に残る畦畔に沿った地形の高まりは築地塀の痕跡であることがわかりました。

溝の中からは、瓦が大量に出土しました。もともと築地塀の屋根の上に葺かれていた瓦が、溝の中に転落したと考えられます。



写真3 築地の痕跡と排水溝

弥生時代の集落か？

ゴミ捨て穴からは、奈良時代の瓦に混じって弥生時代の土器や石器が見つかりました。今回の調査で弥生時代の建物跡などは見つかりませんが、近くに弥生時代の集落があったと想定できます。

まとめ

今回の調査では、国分寺を囲んだ築地塀と排水溝および国分寺に関わる可能性がある掘立柱建物1棟が見つかりました。国分寺についてはまだわかっていないことが多く、今回の調査は国分寺の姿を復元する上で重要な成果となりました。

最後になりましたが、調査にご協力いただいた皆様に感謝を申し上げます。



写真4 瓦の出土状況

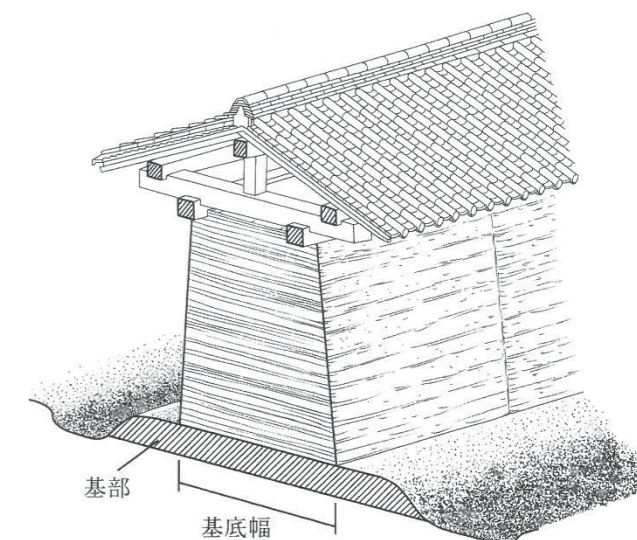


図2 築地塀の復元イメージ (『発掘調査のてびき』を加工)



写真5 ゴミ捨て穴の様子